

學習院大學  
伝定家自筆天福本藏

## 『伊勢物語』本文の様態

室 伏 信 助

### はじめに

平成十二年度、学習院大学大学院人文科学研究科博士課程日本語日本文学専攻における日本文学特殊研究の講義題目に「源氏物語研究」を掲げ、左記のように授業目的・内容を示した。

源氏物語研究は現在、神話学・王権論・記号論・フェミニズムなど、最新の学問の動向に鋭敏に反応してきたという。しかし、その依拠するテキストについては、通行の注釈本文を殆ど無批判に受容している。近代における源氏物語の本文批判の誤りを検証しつつ、本文とは何か、本文を読むとはどういうことかを探求する。

さらに授業計画として「最初は、授業の目的および内容の詳しい説明と問題提起。つづいて、それらに対する質疑応答、討議を経て、具体的な検証を分担して報告する」と記しその計画に沿って進めていくなかで、本文研究の基本として伝来した写本を具さに検証する必要性から、本学日本語日本文学科日本語

日本文学科所蔵の『天福本伊勢物語』を閲覧する機会に恵まれた。これは本学の授業でなければ通常あり得ない稀有の体験で、院生一同の感銘は深く、この貴重な伝本の徹視的な調査に関心が集中した。

この伝本は周知のように、現行の殆ど全ての注釈書の底本に採択され、その意味では新資料では勿論ない。影印本も複数刊行されており、活字本ではない写本のレベルから教材に用いる向きも極めて多い。しかし、このたび初めて原本を閲覧して、市販されている教材がいかに原本と距離があるかを痛感した。授業に参加した院生諸君もそれをつよく実感し認識したところから、今回の調査が開始されたのである。

まず原本に残された全ての状況を、「本文の様態」に絞って徹視的に調査し報告することを参加者全員の合意と協力によって完成することができた。数度に亙る原本閲覧の機会を与えてくださった当局に深甚なる謝意を表する。併せて、この調査報告に全面的に協力された院生諸君に心からの信頼と敬意を捧げ

たい。左記にその氏名を掲げ、尽力を顕彰すると共に、責任の分担も同時に自覚するよすがともなればと思う次第である。

なお、幹事役を全うされた鈴木幹生君が、原本に施された声点について、元本学講師の小松英雄氏から懇切な御指導をいただいたことを記し、参加者を代表して感謝申し上げます。また、本講義が源氏物語の本文批判そのものからかなり逸脱した内容になったことを深くお詫び申し上げるが、古典の本文批判の根底を文字通り手作業で成し遂げた成果を以て、御宥恕を乞う次第である。検討資料を最終的に成文化し、一覧表化を仕上げた鈴木幹生・松原志伸の両君に改めて感謝したい。

## 記

## 目 的

本稿では学習院大学蔵伝定家自筆天福本『伊勢物語』の本文の様態を報告する。この写本は、声点や訂正・補入を含めた書

木村 佐保  
福田ちずか  
市川 祐樹  
菊一恵理子  
鈴木 幹生  
丸山愉佳子  
松原 志伸

き込みが数多く存在し、なかには貼紙でなされたものもある。現在最も信頼され、研究に使われている写本ではあるが、こうした情報は今まで正確に報告されてこなかった。そこで、今回、これらの情報を「様態」の名のもとに整理し、報告する。

## 凡 例

一 表は、「声点」「注記」「補入・ミセケチ」の三つの様態の種類に限って作成した。

二 各表とも、「段」・「丁」・「行」を示した。「丁」には、表「オ」・裏「ウ」の別も示した。

三 表1「声点」について

(1) 表1では、声点についての報告を行う。声点は全て朱によるものであり、文字の左側に差されている。

(2) 「本文」は、声点の差されている箇所の確認の便宜を考慮し、細分化を省いた。

(3) 声点は「平」「上」を使ってその位置を示し、濁点の場合は該当箇所を囲む。また、声点が存在しない文字については「○」を使い、そのことを示す。

(4) それ以外の情報は「備考」で取りあげた。

四 表2「注記」について

(1) 表2では、注記部分についての報告を行う。ここで注記として取り上げたものは、以下の二つのものを指す。

① 本文の横（主に右側）に小字で書き込まれたもの。異本注記や語釈など。

(1) 表3では、補入やミセケチについての報告を行う。

六表とは別に、これらの情報とこの写本の影印本である武蔵野書院発行の『天福本伊勢物語』（今回は昭和三十八年五月初版 平成十二年三月二十四日十三版発行のものを使用）とを比較し、注意すべきことや若干の見解等を「＊」で示した。

[illegible]



63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
	一一四	一〇八	一〇七	一〇一		九七			九六
81オ	80ウ	79オ	78ウ	75オ		ウ		73オ	72オ
3	8	7	1	4	2	1		1	8
おきなさひ	にけ	とは	あさみ	まらうとさね	かに	ちりかひ	むくつけき	あまのさかて	くせち
平平平上	上上	上上	上上上	上上上上上	上上	上平上平	平平上平上	平平上上上	平平平
					「か」右に平の貼紙。		「つ」右に上の貼紙。		

\*武蔵野書院版に声点は写っていない。

表 2  
【注記】

3	2	1	段	
六	五	一	丁	
6ウ	5オ	2ウ	行	
6	4	4	該當部分	
為中宮卅六	高子元慶元年正月	河原大臣哥也 左大臣源融寛平七 年八月薨七十三 於在中將非幾先達 如何	人物	種類
人物	異本		人物	朱貼
	○			
「一條のきさき」に傍記	「いけとも」の「も」に傍記 「も」には朱のミセケチが施 されている↓表3参照	一段の最後 「左大臣」以降割注の形 「八月」に「廿五日」と朱で 傍記されている		備考

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
	二六	二三	一九					一四				九	
	25ウ	21ウ	18オ				14オ	13ウ			10オ	8ウ	7オ
	10	8	2		6	3	2	7			5	5	1
らし	一本なみた	おとこも女も	ゆきかへり	ね	わ一本	家鶏也	東国之習家ヲクタ ト云	桑子蚤也	答憶不知由云々	或本はしりほしの 先人命縦難為塩事 凡卑也／不可用之 心えずとてありな ん／往年有尋問人 答憶不知由云々	此説 好卑詞寂運殊信用 此山此語之習故／	或説云塩尻塩塩と いふ物あり其尻似 此山此語之習故／	昭宣公
異本	異本	その他	異本	異本	異本	漢字	その他	その他		異本	その他	異本	人物
「戔」に傍記	「みなと」に傍記	「はちかはして」に傍記	「あまくもの」に傍記	「あれは」の「れ」に傍記	「くたかけ」の左側に傍記	「くりはら」の「り」に傍記	「きつにはめなて」に傍記	「くはこ」に傍記	「しほしり」記載行の左側三 行小字	「しほしりの」に傍記	「しほしり」記載行の右側二 行小字	「といひける」の「と」に傍 記	「ほりかは」に傍記

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
六四		六二	六〇	五四	五二		四三		三九	二九
44才	42才	41ウ	40ウ	38才	37ウ		33才		29才	26ウ
1	4	6	2	6	7	9	3	10	8	4
男女イ	みイ	しるイ	祇承	とるイ	ない無此字	汝也	賀陽親王桓武第七母夫人多治比氏三品治部卿／貞觀十三年十月八日薨七十八	崇子内親王母橘船子正四上清野女承和十五年五月十五日薨	淳和天皇	貞觀十一年二月貞明親王為皇太子于時高子為女御／依春宮母儀号也去年十二月廿六日誕生高子年廿七
異本	異本	異本	漢字	異本	異本	その他	人物	人物	人物	人物
○	○	○		○	○	○				
○	○	○		○						
「おとこ」に傍記	「なき」の「き」に傍記	「しらす」に傍記	「しそ」に傍記	「たのむ」に傍記	「かさなり」に傍記*1	「な」の左側に傍記	「かやのみこ」記載行左側に二行小字	「たかいこ」記載行右側に一行小字	「西院のみかと」に傍記	「むかし春宮の女御」記載行右側に二行小字

							36	35	34	33	32	31	30		29
									七六	七四			六九		六五
							55ウ	54才	ウ	53才	51ウ	50ウ	49ウ		47ウ
							2	9	9	3	5	4	1		1
若後追善賦	安卒女御法事如何	三年三月右馬頭／天	二月／十六日右大	十六日参議八年十	常行貞觀六年正月	大臣／良相「男」	也／(西三条／右	女御從四位下藤多	賀幾子右大臣良相	女／嘉祥三年女御	天安一年十一月十	四日卒／安祥寺五	条后順子建立寺	意／風姿甚端嚴如	漁獵之娛未嘗留
								人物	人物	異本	人物	異本	異本	神性	清和天皇鷹犬之遊
										○			○		その他
										○					
										「春宮のみやすん所」に傍記	「御むすめ」の左側に傍記	「こよび」に傍記	「いと」に傍記		六五段の最後二行小字
										「たむらのみかと」に傍記	「にあらねとも」に傍記				
										七七段の最後					
										六行小字					
										「常行」以降三行の上に「西					
										三条／右大臣／良相「男」					
										と三行小字					



67	66	65	64	63	62	61	60	59	58
一一二		一〇七		一〇一	九九	九八			九七
80才		78才	ウ	75才	74才	ウ			73才
12	5	1	6	5	2	2	9	7	6
りけ	こイ	敏行母紀名虎女	おイ	藤原良近貞観十二年正月右中弁十六年秋左中弁	業平貞観六年三月右少将七年右馬頭十九年正月左中將	忠仁公天安元年二月十九日太政大臣五十五四月九日從一位／＼二年十一月撰政清和外祖	不審	貞観十七年	昭宣公基経貞観十四年八月廿一日右大臣左大将卅七
異本	異本	人物	異本	人物	人物	人物	人物	その他	人物
	○		○						
「れ」はミセケチか	「ちされる」の「れ」に傍記	「ふちはらのとしゆき」の左側に傍記	「をほみ」の「を」に傍記 朱の補入印アリ	「あるしまうけ」記載行右側に一行小字	九九段冒頭に小字	「おほきおほいまうちきみ」記載行右側に傍記 「天安」以降割注の形	「おきな」の下に小字	「四十の賀」の左側に傍記	「はり河のおほいまうちきみ」に傍記

3	2	1	
	九	五	段
	10才	5才	丁
8	7	4	行
いと	猶	も	該当部分
補入	補入	ミセケチ	種類
		○	朱貼
補入印ナシ	補入印ナシ	いけともの「も」	備考
		「ゆきくて」の前に傍記	
		「おほきなる」の前に傍記	

表3 【補入・ミセケチ】

- \*1 現在の写本の状態では判読不可能。ここでは武蔵野書院版による。
- \*2 貼紙の元の位置の推測は、写本が収められている木箱に残されていた石塚晴通氏の指摘による。
- \*3 現在の写本の状態では69才の一行目にあるが、武蔵野書院版では同じ丁の八行目にある。注記の内容からも、貼紙が移動したものと思われる。
- \*4 武蔵野書院版には写っていない。
- \*5 武蔵野書院版には、「けれ」までしかなく、「は（ハ）」が写っていない。

70	69	68
一一八	一一五	一一四
82才	81ウ	ウ
10	1	6
(けれ)は	てイ無	或多本不可有之云々
その他	異本	異本
	○	
	○	
*5	記*4	「おきのみて」の「て」に傍記



11	10	9	8	7	6	5	4
一一二	一〇七	九四	八一	七八	三四	二四	一七
80才	78才	70ウ	59ウ	56ウ	28才	25才	16ウ
12	2	7	6	1	5	2	5
むかしおとこねむ ころにいひちき る女のことさま に／＼にければ	また	猶	しほ	の	て	て	の
補入	補入	補入	ミセケチ	補入	補入	補入	補入
	○		○				
一一一段最後80才最終行 後から80ウ冒頭行前に細 字で補入*1	「わかければ」の前の左側 に傍記 補入印アリ	「人」の前に傍記 補入印アリ		「おまし」の後に傍記 補入印ナシ	「おもなく」の後に傍記 補入印アリ	「しりにたち」の後に傍記 補入印ナシ	「さくら」の後に傍記 補入印ナシ

\*1 武蔵野書院版には、「さま」までしかなく、「に(二)」  
が写っていない。